ました。

ここは地学博物館なんですけれども、そこの博物館の前に、プラスチックの芝生のようなものがありますよね、それを敷きまして、ラウンジルームというか、皆さんが飲んだり、会話をするような場所をつくりまして、生徒たちによるイベントを開きました。

普通は、この地学博物館というのは、学生しか入らないようなところなんです。それをわざわざそういうようなセッティングをしまして、普通の外部の、学生じゃない人も入って1杯飲んで、学生さんたちとお話ができるような、そういうイベントを計画したということです。

写真を撮るたびに自転車がどこかに写ってるのがわかりますよね。

ミュンスターの場合は、レストラン業というのはすごく盛んなんですけれども、特にテラスですね、まちじゅうにテラスがありまして、皆さんそこでお食事を楽しんだりされています。今、冬なんですけれども、今でもテラスが出てまして、その下にガスのストーブみたいなのが立っておりますね。皆さんそのガスのストーブの下で、それでも外で食べるというような、一年じゅう、ミュンスターはテラスでお食事を楽しんだりするという人が多いみたいですね。それは、もともとは冬にも外で食べるというのは、ミュンスターもそのうち、全面禁煙になるわけですね。そうなりますと、喫煙者の方は、やはりたばこを吸いながら座っていたいということで、外でますます、吸いながら、寒くてもガスストーブの周りで、外で食べるんですけれども、ガスのストーブというのも、要するに二酸化炭素をたくさん出すわけです。それが、今後の課題ということですね、もしこれが全面禁煙となりましたら、ますますレストランはそういうガスのストーブをレストランの外、テラスに出しますよね、そうすると、ミュンスターのせっかくの二酸化炭素削減がまたゼロになってしまうわけです。

ミュンスターは夜にもＰＲをするために、こういうライトデザインですね、照明に力を入れてます。それももちろん、エネルギーを余り使わないような電球を使って、ミュンスターの夜景をショーアップしております。

ミュンスターの建物は黄色い砂のような建物です。それをもちろん一番美しく見えるというような色を研究しまして、選びまして、その色に統一して、ライトアップしています。今夜もぜひごらんください。

もともとは、ミュンスターというのは外観がきれいなんですよね、それをますます、何かけばけばしいライトアップするのではなくて、その美しさそのものを見せるような、ネオンとかでなくて、自然な光で、もともとの歴史的な壁などを見せるような光にしています。ディズニーランドとかのような、そういうネオンのいろいろなカラーではなくて、もともとの古い外観を生かす、自然なライト、光を使うということです。オリジナル、もともとの原形以上のすばらしいものというものはないということで、原形をすばらしくするなら、原形そのものをお見せするというようなライトアップをしています。

ミュンスターの特別なところは、旧市街、まちの中心に大きなショッピングセンターがあるということですね、皆さん、徒歩でお買い物に行けて、そしてそれもすごく成功しているということです。

大体、皆さん、車で遠くに行って、車でお買い物をするという感じなんですけども、ミュンスターはまちの中央に、そういうお買い物をする場所があるので、たくさんの観光客でにぎわっております。きょうまたは、あしたにでもぜひごらんください。これは比較的新しい建物で、去年たしかできました。

もちろん、ビジネスをされる方は、まちの真ん中は、土地が高いので、ちょっと外れに大きなショッピングモール、ショッピングセンターを建てた方がいいんじゃないかという意見もあったそうですけれども、ミュンスター市としては、どうしてもまちの中心にそういう人の集まる場所をつくろうということで、その計画をして、今ではすごく喜んでいます。大成功ということです。

問題としまして、やはりミュンスターの人は自転車でお買い物へ行くわけですが、やはり駐輪、自転車の置く場所がちょっと今限られているというのが、今後の問題ということです。それに比べても、車で行くよりは自転車の方がいいんですけれども。

このプロジェクトは、このショッピングセンターはポルトガルの投資家が投資されてショッピングセンターなんですけれども、ポルトガルの投資家は世界じゅうに７０の、このようなショッピングセンターを建てておりまして、このような、自転車に対する問題というのは今まで起こったことがなくて、戸惑っているようです。

堺市ではどのように自転車は駐車というか、置かれておりますか。放置自転車とか問題になっておりますか。

○西議員　放置自転車は非常に大きな問題になっていて、都心部に、物すごくコアなところに駐輪場がないというのが非常に大きな問題です。そこで、堺にはないんですけれども、東京とかでは、コイン式の、２時間まで無料、それ以降有料になる１００円パークみたいなんもふえてきてます。

お買い物する人だけはお金がかからなくて、そこへとめっ放しでどっかへ行っちゃう人にはお金がかかる。

○説明者　ミュンスターにもたくさん駐輪場があるんですけど、それでもやはりまだまだ必要みたいで、やはり放置自転車というのは問題になっております。

私が話すよりも、きょうごらんになる方が早いと思います。

先ほど話しました港です。ここの市役所の後ろにあるのが港です。そして、そこにある煙突が、昔の石炭発電所の煙突です。昔はこの港を使って、石炭を運んで、石炭で発電所のエネルギーを作っていました。しかしながら、もう石炭ではなく、ガス発電所になったということで、港というものは、ほとんど使われなくなってしまって、それをどうしようかという

のがこれからの計画でした。昔はいろいろな石炭とかを加工する倉庫に使われてたんですけど、今は有名な「ウサギのフェリックス」の、児童書の出版社が入っておりまして、あとアートのギャラリーなどが入っております。

この港の地域ですね、使われなくなっていた地域というのは、７５ヘクタールありました。

ミュンスターは大きいんです。ですけれども、この使われてない場所を使うことで、もっといろいろよい計画ができたということです。その今使われてない倉庫が、レストランやバー、クラブ等の経営者が借りまして、今では、ミュンスターで人気のあるナイトスポットとなっております。

ミュンスターの若くてダイナミックなイメージというのに、すごく一役買っているそうです。今、人気のあるディスコやクラブ、バー、レストランなど、あと若いアーティストのギャラリーなどがあります。まだ、それも完成しているわけではないんです。どんどん今開発されてきております。

今、冬でちょっと寂しい感じなんですけど、夏は物すごく皆さん、日光浴でにぎわって、レストランのテラスではたくさんの人が飲んだり、食事をしたり楽しんでおります。アートのオブジェを置いたり、あと、もともとは港で全然、そういう壁などがないようで、ちょっと酔っぱらってる人とかが危ないということで、ベンチ兼壁をつくったそうです。

もちろんミュンスターというのは、歴史的外観を保つというのは大切なんですけれども、身体障害者にもやさしいまちということでして、車いすの方でも不自由なく移動できるように、また地面の部分を滑らかにしました。

もちろんアートギャラリーとかがあると言いましたけれども、そこでは国際的に有名な、トップテンに入るアートの展覧会があったり、催されたりすることで、アートシーンでは有名になっています。アメリカの有名なアート雑誌によりますと、世界の１０の今、注目を浴びているギャラリーということで、その１つにまで選ばれたということです。

○水谷議員　芸術の話がすごく出るんですが、ドイツは文化とか芸術はすごいんですけれども、ミュンスターで芸術大学があったり、教育に力を入れてるということで、そういったものがどんどんこっちへ来てるということですか。

○説明者　やはり音楽大学や芸術大学という、そういうものがあるということで、そういう方がミュンスターに来たがる理由だと思います。

ノルトライン・ヴェストファーレン州では、芸術大学が２つありまして、その中の１つがミュンスターということですので、たくさんの若い芸術家が来ます。

○水谷議員　大学の誘致をしていくということが、１つの効果になっているということですね。

○説明者　もちろんパリやロンドンのような大都市ではないですけど、そのサイズにしては、芸術や文化というものがすごく盛んなまちです。

あとは、ミュンスターは先ほども言いましたように、ドイツのコンテストでの文化首都２

０１０年に応募しておりまして、６，０００人の人がわざわざ赤い風船を持って、私たちのまちは文化首都にふさわしいまちだという、そういうＰＲのイベントを開いて写真を撮ったということで、６，０００人の人が集まりました。

きょう、多分ごらんになると思いますが、この通り、ショッピング街の通りは、もう人という人で埋めつくされて、ぎゅうぎゅうで動けない状態でした。それで、どれだけ市民がミュンスターに誇りを持っているか、参加しているかというのがわかります。それも、休日だったわけです。皆さん、ドイツ人というのは休日というのはすごく大切にしていまして、そんなわざわざＰＲのためにと、普通は思うんですけれども、こんなにたくさんの方が文化首都というもののコンテストに優勝したくて、みんなＰＲに来てくれたということです。

朝の１０時半には、もうこの満員状態でした。それで、Ｔシャツを、ミュンスターは２０１０年の文化首都にふさわしいというＴシャツを販売したりして、皆さんそれを着られてアピールされました。赤いＴシャツで、５ユーロで、比較的安い、ＰＲですから、宣伝効果ということで、５ユーロで販売しました。

残念ながら、この２０１０年の文化首都というのは、エッセンにとられてしまったんです。そのエッセンも同じようなＰＲをしたんですが、何と６０人しか来なかったそうです。ミュンスターは６，０００人来たんですけれども、今回は残念ながら逃してしまった。

それはまちの構造上の違いでして、エッセンはもともと大きな炭鉱町でありまして、ミュンスターのテーマとしては、歴史の残る、でもそれを生かした都市づくりというのがテーマで、残念ながら、逃してしまいましたが。また次の機会に。

何か質問の方ありましたら。

○池田議員　人口はそんなにふえてないと、先ほどおっしゃってましたね。政策的に人口増の政策はあえてとってないのかというのが１つと、もう一つは、従来からおられる市民の方が、そんなふうに、誇りを持ってもらうというのはわかるんですけど、いかにして、こういう巻き込み方をされているのか。こういう盛り上がりをつくっていけてるのかということについてお聞きします。

○説明者　それはすごくよい質問だと思うんですけど、実は、まちとしては特別そういう誇りを持つようにというようなＰＲはしてないんですけれども、それはもともと、ミュンスターランドというのは、ウエストファーリアというんですけど、ウエストファーリア人の性格というか、大体の性格というのは、外部を余り受け付けずに、自分の生まれ故郷にすごく誇りを持っているというような、どちらかというと狭い、オープンではない、そういう性格で、多分そういうのもあるんじゃないでしょうか。

この古い建物の改修というのも、まちが特別にやったというわけじゃなくて、もともと市民が本当に石を一つ一つ組み立てて、自分たちで昔のミュンスターに戻そうという、そういう思いで直したそうです。

不思議なことに、やはりもう自分のまちだから当然だという、そういうようなふうに育てられてきてるからじゃないかと、ウエストファーリア人の人格というものが大きいのではないかということです。

○池田議員　赤の広場に赤でしょ。ミュンスターのサッカークラブチーム、緑ですよね。

○説明者　緑と黒なんです。

○池田議員　なぜ赤なのかということでは。

○説明者　はっきりはわからないんですけれども、多分、ミュンスターというのは赤い屋根ですね、れんがの屋根というのがミュンスターなので、それで赤というのを選ばれたんじゃないかという説です。それはでも、はっきりはわからない。

それともＰＲの会社が、赤はダイナミックな色だから、赤にしましょうと言ったのかもしれませんけど、赤のれんがの屋根、ミュンスターということで赤じゃないでしょうか。

○西議員　さっきのウエストファーリア人が主体的な参加をする傾向にあるというお話は、キャラクターの問題だと思うんですけれども、例えば、それを起きやすくするために、市が何か仕掛けをしているのかどうか、例えば、それはターゲットを、文化首都にしましょうというターゲットをセッティングするだけなのか、例えばインセンティブを与えているのかとか。盛り上げるための施策って何かしてるんですか。単なるキャラクターで彼らが本当に自主的にやってるんでしょうか。

○説明者　もともと、ウエストファーリア人というのは自分の故郷に誇りを持っていて、もう市は別にいろいろしなくても、しっかりしているのでいいんですけれども、ミュンスターの人というのは、外部に対して、ちょっと敵対心を持っていたり、ちょっと懐疑心を持っていたりするので、そういうのをなくして世界じゅうにＰＲしていきましょう、自分たちのすばらしいまちをＰＲしていきましょうというふうに持っていくのが、ミュンスターの市の仕事です。

○中井議員　自分らのまちに誇りを持つということは非常にすばらしいんですが、そういう市民の人たちの日常で、コミュニティ組織、日本でいえば自治会、そういうものがたくさんあるんでしょうか。

○説明者　ミュンスターはドイツの中でも、市民団体がたくさんあって、活動している市民団体がたくさんあるということで有名で、市民の団体が集まっていろいろ討論をしたりするというので有名です。

例えば、地学の教授をしてますので、地学に関心のある市民たちが集まって、地学の話をしている、討論をしたりとかいうのもありますし、あと、先ほど言いました環境団体、特に環境の市民団体というのがすごく多いです。

○中井議員　カルチャーのグループなんかは話がわかるんですが、いわゆる日本で言う自治会、地域の人たちの、自分らのまちを住みよくするための、そういう組織というものがこの中に

あるんでしょうか。

○西議員　趣味ごと、目的ごとじゃなくて、地域に拘束をされた集団というのは存在するのでしょうか。

○説明者　自治組織というものはあちこちありまして、７人以上あれば、自治組織というのができる、別に場所によって活動しているというのではなくて、目的によって、つくっています。

○土師議員　テーマ型のようなコミュニティ、そういう理解でいいんですよね。だから、日本のように回覧板を回していくというのはないのですね。

○説明者　田舎の方の、ちょっとミュンスターの外れの方の田舎の方では、そういうような近所の、そういう日本で言う、近所の回覧板みたいな、隣組みたいなのはあるようですけれど、まちの中は、多分そういうのはないと思います。

○土師議員　ブランド戦略について、ちょっとお伺いしたいんですけども、さっき、マーケティング部があるというふうにおっしゃいましたが。マーケティング部では、年間マスタープランというんでしょうか、コミュニケーション計画、こういうプランというのは立てておられるんでしょうか。

○説明者　まずマーケティングのマスタープランの１つは、ミュンスターは将来どのような方向に向かっていくかということを５年から１０年計画で立てていきます。それで大学と協力しまして、また３年プランというのを大学とはつくりまして、１年ごと、そういうことで行動もしていきます。

　マーケティングとしては、外部へのコミュニケーションということだけではなく、市場調査というものを取り入れます。教育の場にいる人と市民たちが集まって議論をしていくというようなことでマスタープランがつくられています。

○土師議員　貴重な情報を本当にありがとうございます。

　ちなみに、そのマスタープランは外部に発信しているんでしょうか。

○説明者　公衆が見れるように公開していくマスタープランですので、どなたでもごらんになれるということです。もちろん、市民の皆さんに公開しているということです。

　なぜ、暮らしやすいまちコンテストで受賞したかというのは、ミュンスターがそういう都市計画というのに１，０００人の普通の市民を招いての討論会でマスタープランを立てていくということが評価されたということです。１，０００人の知らない人たちを招くというのは、市民の人たちを招いて、それで議論をしていって、マスタープランをつくっていきました。

○土師議員　ちなみに先生がそれを編集されたんでしょうか。

○説明者　そうです。

　ミュンスターというのは文化、アートがすごい盛んと言ってますけど、もともとそういう

文化に興味があったわけではありません。１９７０年にミュンスター彫刻プロジェクトというようなイベントをするようになりました。この３つの大きなビリアードのボールというオブジェなんですけど、その当時の７０年代のミュンスターの人たちは、何だこの変なボールはということで、全然評価をしていませんでした。でも、３０年後、彫刻プロジェクトとか、そういうのも今では認められて、ミュンスターの誇りの１つになっております。

環境保護ということは、別にいいことをしてるというわけじゃなくて、自分にもいいことだということを教えるということですね。ミュンスターというのは、環境にいいから自転車に乗れというふうに押しつけてるわけじゃなくて、市民が自然にそういうふうに考えるように持っていけるような都市計画を考えています。

押しつけるという形ではなく、市民みずからがしたいという、自分でこのようにしていきたいというように持っていくようにしております。

自転車が乗りやすいように、先ほども言いました自転車アウトバーンの並木道があります。本当はミュンスターというのは自転車の事故が多いんです。子どもはヘルメットは絶対つけないといけないんですけど、大人はつけなくてもいいんですね、今のところ。でも、今ちょっと考えているのが、将来は大人もヘルメットをつけさせないといけないのではないかというような話も出ています。

大学の同僚の教授も自転車の事故で頭を強く打ちまして、それでちょっと身動きができないような状態になっています。自転車に乗るときは、日本ではヘルメットは着用は義務づけられていますか。

○水谷議員　学生が通学のときにやっているところはあるけれども、ほとんど今は義務づけてるようなことはありません。

○西議員　推奨はされてますけれど、義務ではないです。

○水谷議員　法的な義務はないです。単車は義務づけられています。

○説明者　ドイツでも、バイクの場合はヘルメットをつけるのですから、自転車もヘルメット着用を義務づけるべきではないかという話が出ています。

○水谷議員　きょうは、こちらに寄せてもらったときに、ここがミュンスターだなと思ったことが１つあるんです。それは、自転車がすごくたくさんあって、自転車の道路が整備されていて、またそういった形で、ここはミュンスターだなというイメージがすぐわいたんですけれども。そういうことですばらしいまちだなと思ってたんですけど、事故はやっぱり多くあるというので今びっくりしてるんですけど。

○説明者　ノルトライン・ヴェストファーレン州で自転車事故が多い方から２番目から３番目です。それは、自転車の数が多いからなんですけど。パーセントからしてもやっぱり高い。

事故の２つの大きな原因は、ミュンスターに住んでいる人たちは、もちろん気をつけて車に乗りますね、自転車のまちということで、そういうことをしてるんですけど、外部から来